

特集1 辻番所・足軽屋敷ワークショップ

8月2日(土) 辻番所・足軽屋敷の活用を考える第2回ワークショップが、彦根市芹橋二丁目に残る辻番所をもつ足軽屋敷で開かれ、約40人が参加されました。その概要をお知らせします。



■ 急がれる辻番所・足軽屋敷の修理・保全

滋賀県立大学 濱崎一志教授(建築)

足軽屋敷はシロアリの被害がひどく、地震などで倒壊する危険があり、柱の応急補強を行う。辻番所も、基礎が腐るなど老朽化が著しく、支柱で支える対策が必要。辻番所は、元の姿を確定してから本格的な修理を行う。

彦根の城下町遺産として、足軽屋敷、辻番所は極めて重要であり、市が買い取ったあとは、文化財として早急に保存・修理が行えるよう努力したい。

■ 辻番所・足軽屋敷の取得運動と今後の運営

彦根景観フォーラム理事長 山崎一眞・滋賀大教授

市民の力で集まったトラストの寄付金600万円を彦根市に寄付し、市が文化財保護基金を活用して8月中に買い取る。市は、運営は市民とNPOにお願いしたいという意向。建物は、元の姿を取り戻すことが優先する。その上で、どう運営するのか、地域の皆さんと考えたい。さらに足軽組屋敷の保存と芹橋の未来をどう描くのか、「歴史遺産を活かしたまちづくり」を、住民主体で実践してゆきたい。

■ 保存と活用ワークショップ

芹橋自治会役員や関心の高い人たち約40人で2班に分かれ、活用案と担い手を議論した。

第一班では、自治会館として、老人会の料理教室、趣味のグループへの貸出、コミュニティ食堂の開設という案と、足軽屋敷記念館として、芹橋の歴史や遺産を紹介し見所をガイドする拠点とする案が示された。

担い手は、芹橋二丁目自治会、足軽倶楽部、景観フォーラム等で連合会をつくり、足軽屋敷に「屋敷守」をおき、当面土・日を開放するなどが提案された。

第二班では、高齢世帯、単身老人世帯、空家が多く、地蔵盆ができなくなった、歴史好きな人が多いという背景から、①歴史講座や手作り甲冑教室などの開催、②地域の古民具、古文書、ひな人形の展示イベントなどをおこなう「芹橋サロン」を開設する、芹橋二丁目の合同地蔵盆をするなどが提案された。

担い手は、新足軽倶楽部を、芹橋や市内から募集、芹橋自治会、景観フォーラムも参加する、建物の管理や活動経費は、将来的にはガイドを養成し、地域のガイドツアーを行うなど観光ルールを導入して経費を確保するなどの提案がされた。

特集2 多賀「里の駅」のめざすもの 一圓屋敷の保全と活用



多賀町一圓の古民家・一圓屋敷を保全し、「里の駅」として活用しようという計画づくりを始めました。

9月28日(日)

第1回シンポジウムを開きましたので、概要をお知らせします。

● 一圓屋敷と「里の駅」のめざすもの

彦根景観フォーラム理事長 山崎一眞・滋賀大教授

一圓屋敷は、江戸時代から続く庄屋で、2007年3月に所有者より「社会的に活用してほしい」と寄付申込があり、6月の総会で受諾を決定した。2008年4月に多賀町・一圓集落の役員さんとも協議し、9月に彦根景観フォーラムに所有権が移転された。

多賀の有志の人たちでつくる「多賀クラブ」と彦根景観フォーラムが共同して保全・活用するため「多賀「里の駅」」を9月1日に立ち上げた。

「里の駅」のめざすものは、「里山一圓集落で培われた歴史・文化を維持・継承し発展させる」ことを基本とし、当面3年間は、住民や多賀町と一緒に保全と活用の実験をしつつ、一圓屋敷を活用したむらおこしや都市住民との交流を模索していきたい。

● 多賀「里の駅」・一圓屋敷を楽しく活用しよう

彦根景観フォーラム会員 母利美和・堀部栄次

一圓屋敷は、井伊直弼が泊まった事実があり、式台や茶室、襖や額、屏風に彦根藩の文人の書や絵、手紙が残っている。また、村方文書が滋賀大学史料館に寄託され、明治以後も政治や経済に関わった文書も見つかっている。

一圓屋敷で、多賀クラブの人たちと毎月第一土曜日に談話室を開催し、里山の散策や自然体験、田舎料理を楽しむことを始める。多賀は、里山の魅力に加え、交通アクセスがよい。滋賀県の世論調査や都市と農村の交流実証実験からみても、都市住民との交流による地域活性化が期待できる地域である。

ポイントは、地元を誇りをもち、地域の意味を語る人の発掘。地元の人々が、地域を歩き、良いところを発見し、学ぶ。その際、外の人を積極的に入れること

で、当たり前のごとに新しい「気づき」が生まれる。

それらを組み合わせ、新しいものをつくり、むらおこしをはじめたい。



● 参加者との意見交換

参加者からは、多賀がそばの生産量で近畿一なのに地元で活用ができていないので、是非活用を考えたいという意見があった。また、都市住民との交流へと一足飛びに展開すると、住民は都市住民が集落内に入り込むことを迷惑だと感じる、慎重に徐々に取り組む必要があるとの意見が出された。

大地震にも耐える伝統民家の改修

ひこね街の駅「寺子屋力石」耐震改修レポート（3）

■ 耐震改修の実際

前回の改修方針に基づき行われた具体的な施工事例を見ていきましょう。改修は、西澤工務店のご協力を得て、できるだけ市民や学生が参加し、事例で学びながら行うワークショップ形式をとりました。

1. 柱の根継ぎと新しい柱の追加

建物を支える柱の根元が腐っていました。これは、壁土が落ちて柱の周りに堆積し、土壌から水分を吸って腐らせたものです。

下部全体が腐った柱は、建物を支える力がないため、腐った部分を取り除き、健全な部分にまで新しい土台をつくり、乗せます。石と異なり土台のコンクリートは水を吸収して木を腐らせることがあるため、コンクリートと柱の間に銅板を挟んでいます。銅がさびて発生するイオンが腐食を防いでくれます。



一方、断面積の半分ほどが腐ってしまった柱は、腐った部分を切りとり、固い「かし」の木で補強しました。

さらに、力石は建具店が営まれていた時期があり、建築当初にはあった柱が切除されている箇所がありました。このため、構造的な歪み、変形が大きく、耐震性にも問題があるため、本来の場所に柱を追加しました。

この部分は、小さな壁と障子を用いてデザイン的に圧迫感がなく採光、通風が可能な工夫をしました。全面を壁にすることと比べると劣りますが、それでも大幅な耐震性の向上が図れます。

2. 足固め

力石には重要な柱と柱を床下で結び、揺れに対して柱がばらばらに動かないようにする「つなぎ材」が不足していました。このため、太い横材をいれて柱をつなぎ、足元を固めました。



柱と横材をつなぐのには「ヨコセン」、「ハナセン」を使い、柔軟性を確保しながらはずれないようしっかりと固める伝統的な技法を用いました。

さらに金具とボルトで連結し、2重の安全対策を講じました。この様子を現在も見られるよう、床にアクリル板がはめ込まれています。

3. 部屋の四隅を固める

通り二ワと部屋の一部に重要な柱に対してL字型に壁を配置すると耐震性は向上しますが、圧迫感がうまれます。

この部分は、小さな壁と障子を用いてデザイン的に圧迫感がなく採光、通風が可能な工夫をしました。全面を壁にすることと比べると劣りますが、それでも大幅な耐震性の向上が図れます。



（つづく）